第四章　第二回　平成二十七（二〇一五）年十二月十九日

四季の行事のおもてなし

山本　三千子（やまもと・みちこ）

「室礼」について

ご紹介いただきました山本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

忘れられかけている年中行事を伝えていきたいとの思いで、三十年ほど前から、東京の杉並区でささやかなお教室「室礼三千」を開いております。そこで、さまざまな年中行事にあわせた季節の盛り物や、現代の住まいに馴染むような室礼の工夫をご提案しております。

明治生まれの両親からは、「年中行事は大事なものだから」と散々言われておりましたが、私自身は、そんなもの古くさくて、面倒だものと思って、ほとんどやらずに逃げておりました。それが、身に起きた、あれやこれやのせいで、現在職業といたしております。

三〇余年前の日航機事故では、五百二十名もの命が一瞬に失われましたが、私の夫もその一人でした。突然夫を失うという、人生のアクシデントに、何をどうしたらよいのか、暫くは途方に暮れておりましたが、夫の母親は、節目節目の法要はじめ、お盆などの年中行事を淡々と行うのでした。お正月に母親が、私の夫の、つまり母親にとっては息子のですが、その影膳をきちんと据える姿に、神仏に対する精

神の高さを感じたものです。つらい体験を経ても、するべきことを粛々と行う母親の姿勢に、明治の女性の頼もしさとともに、年中行事の大切さを思い知ったのでございます。それを契機に、私は年中行事の室礼に向き合い、学ぶようになりました。目下、二人の孫も中学生、高校生になりましたが、若い世代と触れるたびに年中行事の大切さをますます感じている次第です。

「室礼」と書きますと、「礼」の文字があるからでしょうか、「礼儀作法のことですか」と尋ねられますが、本来は「室禮」と書き、神様にお供えをするという意味なのです。「しめす偏」は神様に関係し、旁の「豊」については、「豆」が三方に物を盛ったところを、「曲」は人が身体を曲げて、神様にお供えするときの姿勢を表しています。稲作を中心とした農耕民族であった日本人は、天候に恵まれれば神様に感謝し、逆に、雨が降らなければ雨乞いをして神様にお願いしてきました。願いが通じれば、また感謝をするわけです。

いつもお教室の生徒さんには話しているのですが、こうした太陽の光や雨水といったものからは請求書が来ませんね。気づけば、これは大変なことで、完全なる贈与、天からの全きプレゼントなのです。ですから、日本人は古より、お米が実ったときには、その贈与に対する返礼の儀式を作り上げてきたのでしょう。天からいただいたものに対して感謝の心を返礼として捧げる。こうした「感謝の心」が、いつの時代からかは、はっきり分かりませんが、年中行事の型を生み出し、私たち日本人の暮らしの中にある精神文化となって、代々伝えられてきたのでしょう。

季節ごとの様々な年中行事を、毎年繰り返しているうちに気づきましたのは、日本人が、言葉によっ

てではなく、物に心を重ね合わせて思いを表してきたということです。これは「寄物陳思（きぶつちんし）」といいますが、このスタイルを日本人は精神の拠り所としてきたのです。「物」に込められた思いや、なぜ、その「物」なのかなどを考えながら室礼に向き合っておりますと、先人の深い思想や意識に触れることができます。では、ここからは、その室礼の一例をご紹介いたしましょう。

お正月

お正月の「門松」には、「立てる」という言葉を使います。「立てる」とは、天と地をつなぐということで、「門松」は彼方からいらっしゃる神様への、いわば目印になるわけです。日本の神様は常住しておられるのでなく、山の彼方、海の彼方から訪れていらっしゃる「客神」なのです。「神様をここでお待ちしております」という私たちの“待つ心”を「門松」で表しています。「待つ」を同音の「松」に託して表現するという方法を、私たち日本人の感性は取ってきたのでした。

さて、「門松」を目あてにいらしてくださった神様は、家の中にお入りになります。姿かたちの見えない神様が、そこで具現化されたものが「鏡餅」で、年神様の象徴です。この鏡餅も本来は、収穫されたお米を家族が搗いて作ったものですから、出来上がるまでの過程で神様と家族が一体になるという機会があったのです。現代では想像がつかないほどの、神様と人との近さと言えましょう。

現在、東京では、神棚がない、仏壇がない、餅つきもしないというのが普通と思われているようですが、神様との距離も遠くなってしまったのでしょうか。そもそも、東京という街が、地方から次男や

三男が集まってきて出来たところですから、故郷で普通に行われているような年中行事をあえてしなくなったのも無理はないのかもしれません。

そんな東京でも、せめて家の中にささやかな聖なる空間を設けましょう、神様にお供えをし、家族とともに感謝を捧げられる場を用意しましょう、という思いで、いわば床の間の代わりとして提案させていただいているのが「長板（ながいた）」です。ここに、ご用意しましたのでご覧ください（写真1）。

松を活けたものは、昔からあるお道具で、「榊立（さかきたて）」です。松の木を麻紐で結んでありますが、こうした「結び」を行うのは、神様と私たちの和合を願う心の形で、ここで神様との交信が成り立つわけですね。

次に、長板の上の、これは文旦ですが、丸い鈴に見立てております。皆様も初詣などで神社にいらしたら鈴を鳴らしますでしょう、あの鈴です。文旦の代わりに、さらに大きな柑橘類である、晩白柚（ばんぺいゆ）を用いるときもございます。柑橘の「橘（きつ）」の音が「吉（きち）」に繋がるので、大きければ大吉の意味となり、好まれるのです。神社で鈴を鳴らすときに、揺らす紐を「鈴緒」と言いますが、その見立てとして五色の紐を使いました。紐に結び目を作り、

写真1

ここでも「結び」を表しています。

ところで、五色というのは季節を表します。青は、といっても緑のことですが、春を示します。赤は夏で、白は秋、通常冬は黒ですが、紐では紫がよく使われます。それぞれの季節に土用がありますから、全てを統べる真ん中に土用の黄色がきます。この五色の紐の色と形は、季節が順調に巡ることを祈る私たちの心でもあるのです。

五色はまた、五常、つまり儒教でいう、人が常に行うべき五つの正しい道「仁・義・礼・智・信」をも表しています。青い色は、相手を慈しむ「仁」、赤い色は「礼」、黄色は人を信じる「信」、そして白い色は、高倉健の世界ともいいましょうか、義理人情の「義」です。また、紫色は人間の知恵を指す「智」です。

こうして見ると、日本の年中行事は神道だけでなく、仏教や儒教からも影響を受けていることに気づきます。かつて遣隋使や遣唐使など、命がけで中国の文化をいただいて帰った先人たちのお陰で、現代に生きる私たちは非常に高度な文化を受け継いでいるということを、改めて認識しなければならないと思います。

節分

節分は、二月の春分の前日、つまり、季節の分かれ目「節分け」に鬼を追い払い、新たな春を清らかに迎えるための豆まきです。古来、中国で行われていた「追儺（ついな）」と呼ばれる鬼払いの行事が伝来し、疫病が流行した七〇六年に朝廷が行ったことに由来するといわれています。

年中行事の基盤である「家庭内文化」では、いわゆる「家の中」と「庭」が室礼の場となりますが、両方に関わる縁側は、自然や神との接点であり、ご縁をいただく結びの場でもあります。節分の豆まきでは、家の中の邪気（寒気や穢れ＝鬼）を縁側から外へ締め出します。映像にあるように、あたり棒（擂り粉木）は鬼の棍棒に対する武器で、鬼を撃つものです。柊は、そのトゲで鬼の侵入を防ぐといわれます。また、節分の豆は、鬼の目を撃つものですから、室礼では堅い生豆を用い、歳の数だけいただくのは、「福豆」と呼ぶ、炒った大豆になります（写真2）。

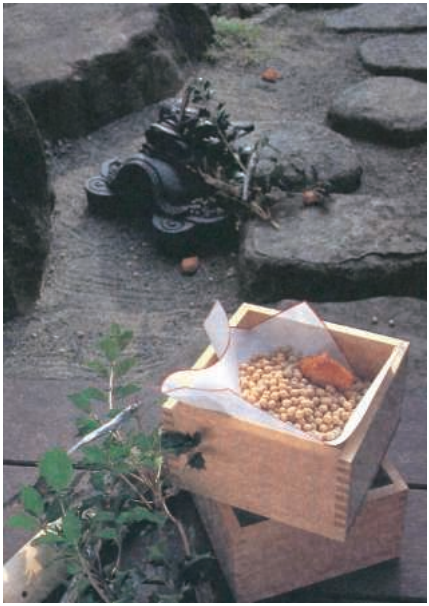

写真2

雛祭り

《写真3》は、「流し雛」ですが、お雛様の行事の原型は、この流し雛で、私たちの身体の穢れを「人形（ひとがた）」に移して、それを水に流すという、いわゆる禊の考え方なのです。雛祭りは、古くは「三月上巳（じょうし）の節供」ともいい、三月（旧暦）上旬の巳の日に野や浜で遊び楽しむ風習にちなみます。また、中国での上巳は、「踏青（とうせい）」といわれ、青い草を踏み、川で禊をして酒を酌み交わし、穢れを祓った日でした。流し雛に使われる人形は、昔は草や紙で作られましたが、やがて白い布の物に代わり、いつしか、宮廷の雅な情景を映す雛人形となりました。

《写真4》の室礼は、室内にグリーンの毛氈を敷き、野遊びの情景に見立てた「雛の国見せ」を示しています。鳥をあしらった軸を掛け、春の花を活け、雛あられを川に見立てました。

昔は、病気などで亡くなる子どもも少なくありませんでした。《写真5》は、そうした亡くなった子供さんのための供養のお雛祭りです。白い人形を用い、雛祭りといえば付き物の桃の花に代わって、菜の

写真3

写真４

花を活けています。菜の花は、そこから採れる菜種油がお灯明に使われることから、故人を招くお雛様の宴にふさわしい花といえるでしょう。利休が切腹する際に、菜の花を一輪活けたといわれることも思い起こされます。菜の花とともに胡麻（護摩に通じる）も活けてあるのがお目に留まるでしょうか。

写真５

花祭り

四月八日のお釈迦様の誕生を祝う仏教の行事が、花祭りです。花の中に、筍が活けてありますね（写真６）。地上に頭を出し始めた筍のことを「筍（しゅん）」といいますが、これは「仏影蔬（ぶつえいそ）」と呼ばれ、釈尊が誕生されたとき、天地を指して「天上天下唯我独尊」といわれた姿を表しています。また、垣根も写っておりますが、これは、神仏は垣根の隙間を通ってこちらに訪れるといわれることを表現しています。ですから、お庭の垣根などは、常にすがすがしく整えておきたいものですね。ここにも大皿がありますが、《写真７》のほうが分かりやすいでしょう。大皿の網目の文様は、一点から網の目が次第次第に広がるように描かれておることから、仏様の教えが限りなく広がっていく様に見立て、その願いを込めて用いられています（写真７－１）。

花祭りの室礼では、このほかに数珠や散華（さんげ）も欠かせません（写真７－２）。散華というのは、仏教の行事で

写真６

撒かれる、蓮の花をかたどった物です。花祭りの行事では、参詣者が誕生仏の頭上から甘茶を注ぐことにちなみ、花祭りの室礼では、お供え後の直会（なおらい）で甘茶をいただきます。

写真7-1

写真7-2

端午の節供

五月になりますと、鯉のぼりや五色の吹流しが空に舞う、端午の節供を迎えます（写真８）。

まっすぐに立てた竿は門松を立てるのと一緒で、天と直結し、矢車は風に乗って厄を祓うという意味があります。五色の吹流しは、もちろん五常の心を表します。《写真９》は、大きな白い奉書で折られた兜を三方の上に供え、瓶子に菖蒲を活けた室礼となっています。菖蒲の葉は、古来、中国の端午節で菖蒲を浸した酒を飲み、粽を食べて厄を祓い、健康祈願したことにちなみますが、日本では「尚武」の音に繋がることから、武家の時代から男子の誕生と成長を祝う端午の節供に欠かせないものとなりました。また、《写真10》にありますように、荒磯文様の帯を「鯉の滝登り」に見立てるのも、楽しい室礼となるでしょう。帯の音読み「たい」を「代」につなげ、代々の繋がり・繁栄を願うという気持ちも込められます。大きな屋根瓦を使って、粽と柏餅の盛り物（その形態から男女を表す）を加えることで、「結び＝産霊」という言葉の盛り物に

写真８

も仕上がっております。柏の葉は、ご存知のように、親の葉が枯れても、子の葉が芽を出してくるまで見守っていることから、親の愛を象徴するものでもあります。端午の節供に、こうした先人の知恵を大人にも子どもにも話して聞かせたいですね。

写真９

写真１０

水口まつり

六月になりますと、田植えが始まります。六月六日は二十四節気の「芒種」で、稲や麦など芒のある穀物を植える時期をいい、ここからその年の稲作がスタートするということです。《写真11》をご覧ください。早苗と「田作り」があります。「田作り」は「ごまめ」ともいいますが、たくさんのお米が穫れますようにという願いが込められています。奥にある「つくね芋」は、早苗の根がしっかりつきますようにという願いです。このように「物」に思いを込めることを「寄物陳思（きぶつちんし）」といいますが、日本の室礼の文化の底にある考え方だといえましょう。水口まつりは、田の隅で行われることが多いですが、室内の縁側で行うときには、人が足で踏むところに直にはお供えせず、必ず敷物などをしつらえ、神聖な場所を作ってから、そこに供えます。見えないものへの敬意が表れている所作だと思います。

さらに六月には珍しい行事「嘉祥菓子（かしょうがし）」がございます。現在は、六月十六日を「和菓子の日」としていますが、元は、仁明（にんみょう）天皇が元号を「嘉祥」に改めた際に、疫病退散と招福を祈ってお菓子や餅を神に供えたことに始まるといわれております。《写真12》は、色が見づらいかもしれませんが、五色の饅頭で、ここにも「五常の心」が出てまいります。家庭で祝うときに

写真11

は、地方地方にある季節のお菓子などでもよろしいでしょう。

《写真13》は、「祝い七つ菓子」といわれる盛り物で、中央に「水無月」が見えますね。これは、六月の月名でもありますが、三角の形は蛇の鱗を表し、厄除けを願うものです。表面に載っている小豆の赤色もまた厄除けの意味を持ちます。地方によっては、この時期に食すと、一年間無病息災で過ごせるともいわれております。涼やかな「茅(ち)の輪」もございますね。六月末の「夏越しの祓い」という厄除けの行事では、「茅の輪潜り」が行われますが、それにちなんだお菓子です。日本人が、年中行事を通して折々に厄を祓い、健康で、代々命をつないでいけるよう、氏神様―自分たちのご先祖様―にお願いしてきたことが改めて伝わってまいります。

写真13

写真12

七夕まつり

七夕は、中国に伝わる、牽牛と織女の伝説に由来しますが、日本では、旧暦の七月七日に、お盆に先立って祖霊を迎えるための祓いの儀式が行われていました。それがいつしか中国からの伝承と習合して、現在の七夕の形となったようです。この時期は、夏の収穫期でもありましたから、麦を中心とした畑の作物の実りを感謝して祝うというものでもありました。

《写真14・次頁》は、お庭に敷物をして、七夕の室礼をしたものです。神様への感謝を表し、お神酒も供え、水を湛えた「星映しの器」も添えました。《写真15》は、麦の収穫期にちなんだ麦饅頭ですね。七夕には、笹の葉に五色の短冊をかけますが、この短冊、元は、芋の葉におりた露で摺った墨を使って、梶の葉に和歌をしたためた風習から来ているそうです。《写真16》が、梶の葉です。

江戸時代には、願い事を短冊に書いて笹竹につるし、翌日川に流すという、現在の七夕行事に繋がる風習が始まったといわれております。また、中国の「乞巧奠（きこうでん）」に倣い、お裁縫や芸事の上達を願う意味で、「鹿の巻筆」、琴柱、赤い糸を通した針も、七夕の室礼には添えられます。

写真15

写真16

写真14

お盆

いよいよお盆を迎えます。ご先祖様の霊が、胡瓜の馬に乗って、茄子の牛に荷を載せて帰っていらっしゃる。《写真17》は、お迎え火の室礼です。お迎え火は、十三日に麻がら（皮をはいだ麻の茎）を焚いて用意し、精霊棚には、夏に収穫される瑞々しい野菜などを供えます。仏壇がなくても、お写真を立てたり、おばあちゃまのお着物などを添えたりして偲ぶということが、ご供養になるのでしょう。お盆の二日間をご先祖さまとともに過ごしたら、お帰りになる十六日の夕刻には、送り火を焚いて道を照らしてお帰りいただきます。

孫が生まれて十年間ほど、こうしたお盆の行事を続けておりましたら、いつのまにか孫たちも準備やら何やらを覚え、率先してやってくれるようになりました。暮らしの中で行っていれば、世代に関係なく、自然と受け継がれていくものですね。ご先祖への思いを絶やさず、行事を続けていくことの大切さを改めて若い人たちとともに感じております。

重陽の節供

九月九日の重陽の節供は、中国由来の行事ですが、中国の陰陽説によれば九は最大の陽数（奇数）であり、それが重なる九月九日は大変おめでたい日とされていました。日本にも早くから伝えられ、平安時代には宮中の行事となっておりました。前の晩には、菊の花に綿を被せて、夜露と菊の香りを染み込ませる、「菊の被綿（きせわた）」を行います。そして、九日の朝にその綿で顔や身体を拭くと、若さと長命が保たれ

写真17

るといわれておりました。そうした場面が「枕草子」にも描かれておりますが、何ともゆかしい文化ではありませんか。また、酒宴では、杯に菊の花びらを浮かべた菊酒を飲み、長寿を願います。この日は私も菊酒をいただくことにしておりますが、息子には、「これ以上まだ長生きするのですか」といわれております……。

菊にまつわる、こうした嗜みを、教室で学ばれた生徒さん方が、それぞれの場で活かしてくださっているのは嬉しいものです。鎌倉彫をなさる方は、菊の文様を作品の中に取り込み、ご長寿のお祝いに差し上げたり。また、《写真18》のような、みごとな細工の菊の和菓子も昔から作られております。

《写真19》は、菊の文様の深鉢に、別称、菊座瓜という南瓜をしつらえたものです。普段は、このように同じものを重ねて用いる室礼はしないのですが、菊だけは「菊尽くし」として特別に善しとされています。長寿を願うという心が、それだけ尊ばれているということでございましょうね。

写真18

写真19

お月見

日本人が芋を主食としていた時代、旧暦八月の満月の夜に、里芋の収穫を祝う祭りをしていました。これに観月の趣向が加わり、「お月見」の行事となったのです。このときの月を「中秋の名月」または「芋名月」とも呼んでおります。里芋をはじめ収穫された季節の野菜を感謝とともに供えます。さらに、旧暦九月十三日の月を「十三夜」と呼び、愛でる風習も加わり、十五夜と十三夜の両方の月を観ることが「月見」とされました。どちらか一方しか見ないのは「片月見」といい、不吉なものとされたのです。

《写真20》は、駒澤大学での十三夜の室礼の模様です。十五夜からほぼひと月後の時期で、収穫物も変わりますから、この月は「豆名月」「栗名月」とも呼ばれております。十五夜には十五個、十三夜には十三個、若しくは三個を供える団子ですが、満月を表す意味があり、ススキ（尾花）は、稲穂の見立てといわれます。同時に、まっすぐなラインのススキと丸い花器で、男女の結びを表すことから豊穣を表現しているのも、この季節ならではの込められた思いといえるでしょう。

旧暦の年中行事を新暦で進める現代ですが、不都合が起こるのが、このお月見の行事です。旧暦では八月十五日は必ず満月になるのに、新暦ではそうではなく、「中秋の名月」でもありませんが、いたしかたありません。

写真20

七五三

子どもの健康と成長を願って行う祝い事を「通過儀礼」といいますが、七五三もそのひとつです。《写真21》では、床の間に、神楽鈴といわれる桐の実を、また、「七徳」という言葉を七つの柿で表しました。手前にあるのは箒草で、「高砂」で姥が手にしている箒にちなんだ言葉の盛り物です。さらに、無病息災を願う六個の瓢箪も加えました。この行事には、家にある、家紋のついた袱紗（ふくさ）など、普段しまったままにしてあるものも取り出して、子どもたちの成長とともに家の代々ということにも思いを馳せ、形にされてはいかがでしょう。

そもそも七五三の行事が十一月十五日に固定されたのは、江戸時代、三代将軍家光が、病弱の息子徳松（後の五代将軍綱吉）のために袴着の儀式を執り行ったことによるといわれております。やがて庶民もこれに倣ったのでしょう。

古くは男女ともに三歳になると、それ以後は髪を伸

写真21

ばす「髪置き」を行いました。男児が五歳になると、初めて袴を着ける「袴着（はかまぎ）」「着袴（ちゃっこ）」の儀式に臨みます。《写真22》は、着袴の儀で使う碁盤と同じ寸法の木地板に懐剣と扇子を添えて、武と礼儀を表しました。七歳になる女児は、付け帯を解く「帯解き」の儀式を行いましたが、そこから正式な着物を身に着けるようになることから、《写真23》では、厄除けを意味する赤い着物、帯と簪（かんざし）を供えてあります。

こうしたお祝いの席には、「三多（さんた）」といい、「多福・多寿・多男子」の意味を果物に託して柑橘類や桃、柘榴を盛ることもいたします。「三多」は「松竹梅」と同じようにお祝いの意味なので、お正月などにもしつらえていただける盛り物です。

写真22

写真23

冬至

十二月に入ると、一年で最も昼の時間が短く夜の時間が長い、「冬至」を迎えます。昔の人は、日照時間が次第に短くなることにどれほど心細さを感じたことでしょう。ですから、冬至の日を境に、再び日照時間が伸びていく、つまり、太陽の力が回復していくことへの喜びはひとしおであったはずです。その意味で、冬至は大変おめでたい日でもあるのです。日本では、太陽の力が蘇る「一陽来復」の日として、また、世界中の国々では太陽が戻ってくる日として祝われています。

皆様もこの日は、南瓜や小豆を召し上がったり、柚子湯に入られたりなさるでしょう。冬至の行事は私たちの生活に根づいてまだまだ続いておりますね。思えば、こうした習慣も、新鮮な野菜が少ない冬場の時期に栄養価の高い食べ物、身体を温め、また、厄除けの意味も込められている食べ物を食すことで冬の寒さを乗り切って、新年を健康で迎えられるようにとの、昔の人の知恵であったのでしょう。そこで、一年間無事に過ごすことができた感謝の気持ちを、十二か月を表す丸もち十二個と、難を転ずるといわれる南天の赤い実に託して盛り物としたのが、《写真24》です。力強さとともにほのぼのとした雰囲気が漂ってくる室礼ではないでしょうか。

また、年末の時期には、「運盛り」という室礼もよく行われます。来る

写真24

年の運を願って南瓜・瓜・大根・蓮根・人参・金柑など、言葉の最後に「ん」がつく野菜や果物を盛ります。言葉を形にした盛り物ですが、楽しいので、お子さんやお孫さんも交えて「ん」のつくものを思い巡らしてみるのはいかがでしょうか。ほかに、ぎんなん、いんげん、うどんなども「運盛り」の室礼に使うことができます。五十音の最後の文字である「ん」。「運盛り」の室礼は、一年間お世話になった感謝の心を形にして一年を締めくくるにふさわしいものといえるでしょう。

以上、一年間の行事をご紹介させていただきましたが、いかがでしたでしょうか。年中行事にちなんだ室礼で大切なことは、「心や思いを季節の物に託して盛る」ということです。最初にも触れましたように、かつては室礼のメイン舞台であった床の間や縁側が、住まいから姿を消しつつあるうえに、昔からのお道具類も揃っていないことが現実です。この国に伝えられてきた行事の室礼に欠かせないお道具は、その空間と一体となるときに意味や力を大きく発揮しますから、大切なものではあるのですが、まずは、現代の私たちの生活において「感謝してお供えができる祈りの空間を家の中に持ちましょう」とご提案しております。先にお話しした長板でなくても構いません。お盆ならどちらのお宅にもおありでしょう。そもそもお盆は、物を運ぶためでなく、お供えするためのものでした。お盆に新しい半紙を敷いて、その上に季節の物や、思いを込めた物を盛るだけでお供えのお道具となりますから、是非お試しくださいませ。そのお盆をテーブルなどの上にしつらえたとき、感謝の気持ちが形になって現れていることに気づかれるでしょう。

室礼で季節の野菜や果物を盛るとき、また、季節の花を活けるとき、私たち自身が、それら自然の産物の命と繋がり、また、それらと同じように自然の一部であることを、ひしひしと実感いたします。それは、言い換えれば、私たちが大地に触れることでもあるのです。年中行事を通して室礼を行う最大の目的がここにあるのだと気づいてからは、大いなる命の循環と、それとの繋がりに自ずと感謝する思いが湧いてまいりました。

皆様もどうぞ、それぞれの地域に伝わる行事や文化、ご家庭に受け継がれている物やことを大切にされて、年中行事を味わっていただけますようお願いいたします。ありがとうございました。

山本　三千子（やまもと　みちこ）

新潟県十日町出身。室礼三千　代表。
南宗瓶華四世故田川松雨先生に師事。
一九九五年より室礼を教え始め、数々のカルチャースクールで講師を務めるほか、雑誌、テレビなどで幅広く活躍。著書に「「四季の行事」のおもてなし」（ＰＨＰエル新書、二〇〇二年）、「暮らしの室礼十二か月」（淡交社、二〇〇七年）、「室礼おりおり」（ＮＨＫ出版、二〇〇七年）など。